

令和4年度 小松島高等学校 第2回学校運営協議会 議事録

1 日 時 令和4年11月15日（火）午後3時から

2 場 所 小松島高等学校大会議室

3 会次第

(1) 開会

資料の確認

(2) 学校長挨拶 [小松島高校 校長 元山茂樹]

ご出席くださり感謝申し上げます。

本日の会では、今年度の取組について中間報告させていただき、ご意見を頂きたいと思います。コロナ禍ではありますが、制限緩和で感染対策をしながら学校行事を実施させていただいております。

(3) 協議

① 令和4年度学校評価中間アンケート・中間評価について

(司会進行・中川会長)

小松島市におけるイノシシ出没の際にも、先生方や保護者におかれましては安全な通学に心を砕かれたことと存じます。この件に関して小松島高校のホームページを調べた際に、小松島高校生が「小松島市逆風マラソンにおけるボランティア」や「小松島市議会学生議会」に参加したこと、またサッカー一部が選手権大会において活躍したことなどを知りました。協議会会長として、こうした教育活動を営む松高の取組を誇らしく感じます。本日は安全対策はもとより、学力向上や地域連携など本校重点課題にそって協議するなかで、生徒の健全な育成と魅力ある学校づくりに資する話し合いができればと考えております。

(事務局・廣瀬教頭からの説明)

9月に生徒・教員・保護者を対象に教育活動に関する中間アンケートを行った。生徒・教員はClassiという教育クラウドサービスを利用し、保護者には従来通りアンケート用紙を配布して行った。他の学校でもみられるが、教員の意識と生徒・保護者の実感に乖離がみられる。スクールミッションについては教員はほぼ100%認識しているが、保護者は3分の1程度の認識であった。広報が不十分であると考えている。タブレット端末の活用についても、保護者は4分の1、生徒は5分の1が役に立っていないと考えている様子であり、一方で教員は役に立っていると思っている。生徒授業や探究活動については保護者に理解していただく機会を取れていない。部活動やボランティア活動については、生徒が家庭で話していると思われるため、高い評価をいただいている。松高セミナーについては、これまで朝の勤務時間外に行っていたが、働き方改革の観点から、業務時間内の放課後実施に変更した。未来手帳についてはキャリア教育の柱と考えているが、生徒の約3分の1が役立っていないと考えており、取組の改善が必要だと考えている。

ホームページはこれまで150回以上更新をしているが、保護者生徒ともに評価は高くなかった。広報において課題があると考え、改善を図るため「松高だより」にホームページのQRコードを掲載したところ、閲覧回数が多くなった。保護者の個別の意見については、「コロナ禍で保護者の参加できる行事がほとんどなく残念だった」、「アンケートの項目について判断できる材料を持っていない」などがあった。今後は、ホームページを見ていただけるような工夫を行っていきたい。総括評価表については、先ほどの中間アンケートを元に、中間評価を行った。6つの重点課題について、各担当が目標を立てて、その進捗状況を元に中間評価をしている。先日、学

校評価委員会を開き、改善点について話し合ったところである。

(佐藤委員)

総括評価表の5ページのキャリア支援課の②-1に、基礎学力の向上を図ると記載がある。意味があってここに記載されていると思うが、本来キャリア教育は多様化するグローバル社会に対応できるような生きる力を育むことをめざしていると思うのだが、基礎学力の向上を図るという目標は、ここに記載するのは適切なのか。

(中川会長)

キャリア教育といえば問題解決能力を育てることであるということだが、基礎学力といえば、大学入試の対策のように感じるかもしれない。

(廣瀬教頭)

中川会長がおっしゃったとおりで、進路保障をするためにまず必要となるのは基礎学力を育むことであり、キャリア支援課の中で、第一に考えているところだと思う。目の前にある進路を実現することが最も大事なことであり、そのために基礎学力の充実を図ることがキャリア教育の柱であると考えている教員も多い。

(元山校長)

キャリア教育は全般的にいろんなことをする。重点目標ということであるので、一部を書いている。3年間を見通したキャリア教育の計画を担当にお願いしているところである。

(佐藤委員)

学校で教わる基礎学力は必ず役に立つものである。学校で習うことは社会に出てから役に立たないという大人がいるが、それは間違いで、上手に使えていないだけである。単に基礎学力を詰め込むだけではなく、上手に使えるようになる知識力を身につけるよう意識づける機会を作ってほしい。理系の知識に文系の力が身につけば大きな力になる。単に基礎学力を詰め込むだけでなく、有効に使えるよう生きる力に変えていってあげてほしい。

(中川会長)

関連した質問があったらお話しいただきたい。

(藤本委員)

担当する校務分掌に、進路指導課がないように見受けられるが、キャリア支援課が同じものであるのか。進学先などの指標などもないように思うが。

(廣瀬教頭)

令和2年度に校務分掌の組織改革を行い、進路指導課がキャリア支援課となった。担当内容は、進路指導課と同じである。進路の指標については希望する進路への進路決定率100%をめざしている。

(畠委員)

中間評価アンケートにおいて、保護者の回答として「やや思わない」という項目が多いように感じられ、学校側の意向が保護者に伝わりきっていないように思われる。情報を伝える側と受け取る側のキャッチボールがうまくいっていないのではないのか。キャッチボールがうまくいくようになれば、改善されるだろうが、伝えようと思っても伝えきれないことがあるのも事実である。ミッションやポリシーなどは抽象的なもの、質的なものであるため、このような傾向が出て仕方がない部分で

あると思う。「未来手帳」や探究活動においても、数字で表されるものではなく、質的なものである。そうした活動は、保護者の世代にはなかった教育活動なのでイメージができないのではないか。また、こうした活動は、生徒の理解度が深まっていけば卒業後の進路にも役立っていくのではないかと思う。

私は大学側の人間として企業の方とお話をする機会が多くあるが、そこで聞くのは、昭和の時代であれば、言われたことをきっちりとする人が評価されたが、現代においては、自分で選択することが求められるということである。自分で選択するときには、その判断の基準として外を見るのではなく、中を見ないと選択できないため、中を見るスキルが必要になる。そうしたスキルを身につける上で、探究活動や「未来手帳」は大事な取組であり、時代とともに、理解が進んでいくと思う。結果を悲観的に捉えるのではなく、希望を持って取り組んでいただきたい。

(廣瀬教頭)

学校の特色ある教育活動を、保護者にもっと周知するべきだと考えている。

(島委員)

学校としては、今が限界なのかもしれない。理解しようとして情報を見ているのか、単に情報として見ているのかによっても結果は異なる。

(元山校長)

昨年度スクールミッションが教育委員会から伝達され、夏までにスクールポリシーを作成した。本校ではそれまでにグランドデザインが描かれ、校訓をもとにしたスクールポリシーを作成することができた。本校で行われてきた教育活動を言葉にしたポリシーであり、保護者への周知は昨年夏から行っているが、ホームページの情報ははじめとして、まだまだ保護者に十分に伝わりきっていないと感じている。改善の一步として、「松高だより」にQRコードを掲載したところである。

(廣瀬教頭)

〈久保教諭へ〉担任として意見を伺いたい。「未来手帳」のことについて、保護者に伝える機会はあるか。

(久保教諭)

三者面談に「未来手帳」を見せて、伝えている担任もいる。生徒が効果を実感する機会が少ないのかもしれない。生徒に対して具体的な未来像を説明し、未来手帳の意義を伝えていきたい。

(廣瀬教頭)

生徒の中で使えきれていない生徒はどのような生徒か。

(久保教諭)

いろいろなタイプの生徒がいるので、一概には言えない。

自分のクラスの生徒たちは、朝のホームルームに手帳を開き、昨日1日を振り返ったり、現在の心身の調子を記録したりしている。また、1週間の終わりの時間に設定されている探究の時間に1週間の振り返りを行っている。

(廣瀬教頭)

まだ、「未来手帳」を作成した理念などを、教員間で共通理解が図れていない部分もある。まずは、教員間での共通理解を図りながら、生徒に手帳や振り返りの重要性を伝え、保護者にも伝わっていくようにしていきたい。

(中川会長)

キャリアパスポートと「未来手帳」は同一のものか。

(廣瀬教頭)

キャリアパスポートを、本校では「未来手帳」と呼んでいる。

(畠委員)

アンケート結果をみると、保護者や生徒に先生方の取組が伝わっていないことが残念であった。

(中川会長)

大学で、教員採用試験の指導をしているときに、教員を志望している学生もキャリアパスポートの重要性について理解できていない様子だった。キャリアパスポートは、自分がこれまで何を学んできて、未来にどんなことを成し遂げたいのか、そのためにどんな学びが必要なのかを書いていくものである。キャリアを形成するためには、自分で自分を導く力が必要である。畠委員がおっしゃった、質的なものを生徒も保護者も実感するような機会を設けることが必要なのではないかと感じた。

(廣瀬教頭)

〈藤本委員に〉中学校でのキャリアパスポートの取り組みを伺いたい。

(藤本委員)

十分な活用ができていないかどうか、示された質問に対する答えを書くだけになってしまっているかもしれない。

(志摩委員)

話題が変わるが、消費者教育において、「生徒理解度を高める活動を実践する」という具体的目標が掲げられており、「未実施」となっているが、今後行うという認識でよろしいか。

(廣瀬教頭)

未実施と書いてあるが、家庭科の授業の中で3学期に実施する予定である。また、外部講師を招いての消費者教育講演会を実施予定である。

(元山校長)

来年の2月に、2学年対象の講演会を計画している。

(志摩委員)

金融機関に勤める立場から質問した。成年年齢の引き下げにともなって契約に関する教育が不可欠である。経済産業省のアンケートでは、カード会社として回答を依頼されることがある。1年たつと担当省から指針としてまとまったものが出てくると思う。カードの不正利用が出てくるかもしれないので、いつ頃なされるのかと気になった。大人から子どもだからというのではなく、インターネットに触れる機会が多ければ、詐欺に遭う可能性は高まるかもしれない。

(中川会長)

総括評価表の中で、活動計画と実施状況が単に言い換えになっているところがある。実施状況を具体的に書かれてはどうか。

(元山校長)

実施したことを具体的に書けていないところがある。最終的な報告の時に修正してご報告したい。

(廣瀬教頭)

12月に生徒・保護者・教員への今年度の最終アンケートを行うことにしている。第3回の学校運営協議会では、このアンケート結果をもとにした、学校評価の総括評価表を見ていただく予定である。

② 地域・教育機関と連携した取組についての報告

(中川会長)

地域と連携した取り組みについて報告願いたい。

(廣瀬教頭)

地域・教育機関と連携した取組について報告する。

小松島高校のスクールミッションは、自分の物語をつづっていくキャリアパスポート「未来手帳」や生徒が教師役となる「生徒授業」「松原育樹ボランティア活動」など生徒主体の活動をとおして、地域の経済活動や社会生活を豊かにする実践力を育成することとなっている。1年生総合的な探究の時間には本協議会の委員でもある徳島大学の嶋委員に「探究活動を考える」という講演会をお願いした。また徳島大学の学生に探究活動の先輩として、大学での研究や大学生活について話していただいた。ボランティア活動としては、今年度はこれまでに4回松原育樹ボランティア活動を行った。また、小松島市の「逆風」マラソンのボランティアに生徒26名と2名の教員が参加した。さらに、小松島市議会学生議会にも生徒2名が参加した。防災拠点としての避難訓練は、10月に小松島南幼稚園、小松島市社会福祉協議会の方々と合同で行った。また、小松島中学校、小松島南中学校において生徒授業を行うことになっており、今年度は11月に小松島中学校で、12月に小松島南中学校で予定している。また、11月13日にオープンスクールを開催したところ185名の方に御参加いただき、特に本校の保護者の方々に多く来ていただいた。終了後、中学生に感想を聞いたところ、「明るくて楽しそうな学校」だという感想が聞かれた。

今年導入したコミュニティスクールがきっかけとなり、地域や教育機関との様々な連携活動ができている。今後も引き続き、精力的に取り組んでいきたい。

③ コミュニティスクール導入に伴う新たな取組について

(中川会長)

次に、コミュニティスクール導入に伴う新しい取組についての報告をどうぞ。

(元山校長)

本校では、松原育樹ボランティアをはじめとして、校外清掃活動ボランティアや逆風マラソンボランティア、海洋環境クリーンアップ清掃ボランティアを行っている。また小松島市ボランティア友の会「まつぼっくり」への参加を推進している。

今年度から、これまでにボランティアについて認証状を発行していた団体が活動を休止しているのに伴い、小松島市からボランティアの認証をしていただけるよう依頼中である。

(中川会長)

ボランティアについて認証状を発行していただくことがどうして大事なのか。

(元山校長)

コミュニケーション力を涵養する点や、進路実現する際の参考資料となる点で重要だと考えている、以前には、卒業証書授与式の前日の賞状授与式に団体の代表の方から認証状を授与していただいていたと聞いている。認証状を頂くことで、生徒の自信になればと考えている。

(佐藤委員)

小松島市からのボランティア認証をぜひお願いしたい。また、探究活動に徳島大学の畠先生がついてくださっていることはとても心強い。

(元山校長)

畠先生には、新過程の探究活動について、さらに助言いただきたい。

(畠委員)

コロナ禍で難しいかもしれないが、ボランティア先に介護施設などを高校生が行くことを検討できないだろうか。核家族化の中で、世代間交流は大切である。日赤病院が小松島にあるので、献血の啓発のボランティアなどもご検討いただきたい。

(佐藤委員)

私も同意見である。高校生と高齢の方々との交流は少子高齢化を食い止める鍵になると思う。

(牧野教頭)

12月11日に小松島市社会福祉協議会と連携して、地域の高齢者の方が小松島高校へ避難訓練を行うが、その際、防災士の資格をもった生徒も参加する予定である。

④ 各委員からの提言等について

(中川会長)

各委員から、提言をどうぞ。

(内山委員)

地元企業と話をしている中で、普通科高校ではあるが、コンピュータに特化したクラスなどを設置するなど特色ある取組をお願いできないかという意見があった。この他にも、企業と連携した取組を実施することで、より生徒の視野を広げることができるのではないか。

(元山校長)

国の方でも、普通科高校の特色を出していこうという動きはある。本校でも未来のためのまなびプロジェクトを中心に、特色ある取組について検討してきた経緯があり、いい取組はしていると考えている。普通科であるため、「情報に特化」することができるかどうか、判断しかねるところはあり、すぐにはお返事できず申し訳ない。

2番目の地元企業との連携ということは、今回の学校運営協議会の委員を検討する段階で検討した。今回は公的機関ということで市役所の商工観光課の課長さんに入っていたが、次年度に向けて改めて検討していきたい。

(西川委員)

川の浄化活動を、クラブ活動が企業と連携してできないか。学校のクラブ活動がこうした活動を行っているということは大変意義深いことである。

もう一点は、ハナミズキの育樹活動を生徒が中心となってできないか。これまで

ライオンズクラブやロータリークラブなど、様々な奉仕団体が市の花であるハナミズキの植樹活動を行ってきており、勝浦高校とも連携して苗木を無償配布するという取組をしてきた。現在、こうして植樹した樹木の手入れができていない状態であり、それを小松島高校の生徒が育樹するといった取組もいいのではないか。

また、昔の小松島駅の跡地の清掃や整備ができていない。民間企業や若い人々で何か活路が見出せないものだろうか。

(元山校長)

地域の企業や団体との連携を今後も検討していきたい。地域からの声や課題を、探究活動の中で生徒が探しに行くような機会を今後検討したい。

(沖委員)

植樹活動はどのくらい継続しているのか。

(元山校長)

最初の植樹が1999年度であるので、23年継続している。

(沖委員)

学校現場は働き方改革や普通科高校の特色化など改革が進んでいる。コロナ禍で学校行事の見直しも課題となっている。そうした中で植樹活動が20年以上続いているということで、長年続けることの意義は、中間アンケートの評価にも表れている。「未来手帳」についても、活動を長く続けることで評価はついてくる。いいと思う取組は、2・3年でやめてしまうのではなく、継続して行ってほしい。

(元山校長)

松原の育樹活動については、これからも継続して行っていきたい。

活動で出た草を現在は処分しているが、活用方法があるのではないかと考えている。堆肥づくりなどに繋げることで、育樹活動を進化させていきたい。

(島委員)

陸前高田は大震災前は7万本以上の松原が地元の人々の誇りであった。現在は奇跡の一本松として残っているが、松を通じて縁のある小松島市と防災という観点に関わりが持てないか。現在はビデオ会議システムなどを使えば、オンラインで講演をすることもできる。

(谷本委員)

ボランティア活動の面からの意見であるが、小松島市のボランティア団体「まっぼっくり」の活動に関わっていると、中学生や高校生がボランティア活動で高齢者と関わることで、高齢者の方々がとても喜んでいる。生徒たちの力は素晴らしい。活動を通して中高生が学ぶこともあるので、今後もボランティアの募集をしていきたい。

(藤本委員)

中間評価アンケートの最後のページの教職員の方の記述に、校長先生の「丁寧に、ねばり強く」という意識が全教職員に浸透している点が何え、小松島高校の素晴らしい取組を実感した。「今は盛りだくさんであるので、精選してじっくりと一つのことに向き合えるよう配慮していただきたい」という記述は、決してマイナスな意見ではなく、「前向きに取り組んでいきたい」という意識の表れであると思う。

11月18日には生徒授業に小松島中学校にきていただく。学ばせていただきたい。

(佐藤委員)

西川委員や内山委員のお話の中にあった、商工会議所や企業と高校生がともに地域のために活動を行っていくといいのではというお話に共感を抱いた。私はRe:verの活動として、高校生の活動の技術サポートを行っている。彼らのすごいところは学校外の社会貢献活動としてボランティア活動を行っていることである。こうした活動が、学校のクラブ活動ではなく有志の活動であるところが意義深いところであり、企業や行政からも賛同を得て、高校生が主体として行っている。身の回りに潜んでいる課題に気がついて、学校で学んだ知識を生かして、解決に導いていくようなきっかけができればと思っている。地域と連携の中で地元愛、ふるさと愛が育まれると嬉しいと思う。高校生が活躍できるようなステージづくりができればと思う。

(中川会長)

総括評価表には、科目の課題提出率80%という目標があるが、このように80%にしたのは、どうしても課題を難しいと感じる20%の生徒のことを考えてのことだと思う。個別最適化の中で、課題の提出が難しいというこの20%の生徒にどうアプローチするのかを、難しいことだとは思いますが引き続き検討していただきたい。

学校運営協議会の規約を確認すると、この協議会で承認するものが二つある。

一つは学校運営方針であり、5月に承認をした。もう一つは、教育課程の編成である。これは学校運営協議会がスタートをしてからだったので、今年度については見送った。3月の会の時に承認することになるのか。どんな資料で、どんな形で承認することになるのか、ということを検討していただきたい。

(元山校長)

教育課程の編成については、来年度の教科書や教員人事に関わることになるので、来年度の教育課程の提示については不可能であると考えている。来年の第1回の時に再来年度の教育課程の提示をさせていただくことになるかと思う。今後検討していきたい。

(中川会長)

以上で、予定されていた議事が全て終了した。事務局にお返りする。

(4) 閉会

※ 事務連絡（廣瀬教頭）

- ① 第3回運営協議会を来年2月中旬頃実施予定である。第3回については学校評価の最終アンケートの結果をお示しし、総括評価表についてご意見をいただきたいと考えている。開催の1ヶ月前には、日程調整等でご連絡する。
- ② 議事録については、公表する前に事前にご了承をいただくこととする。